スクランブル回数から見えてくるもの

(2009年12月)

column 10

北陸大学東アジア総合研究所所長
叶　秋男

最近本学の国際関係論専攻の田中康友准教授から、近年再び自衛隊によるスクランブル（国籍不明機の領空侵入に際して、迎撃戦闘機が緊急出動すること）回数が増加しているとの話を伺った。共産圏崩壊後、新生ロシアの登場によって極東でも劇的な緊張緩和が生まれた結果、自衛隊機のスクランブルも激減したと聞いていたので、これはどうしたことかと関心を抱いた。

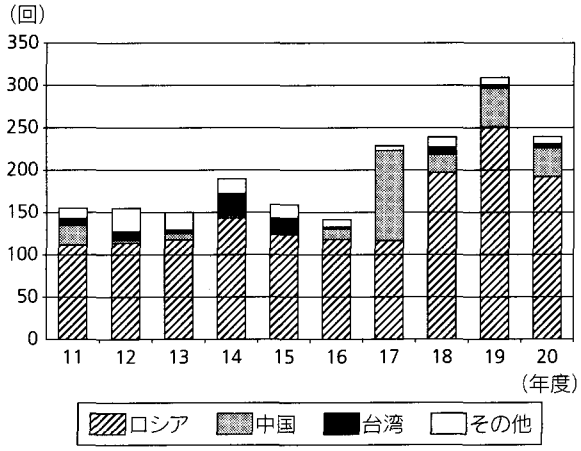
早速2008年度版『防衛白書』を見たところ、それまで年間総数で150回程度だったものが、05年から200回を超えるようになった。その年の主たる急増原因は中国機によるものだが、ロシア機によるものもこの年から増加傾向に入った。

このようなスクランブル回数増加の背景には、世界的な好況と石油資源等の価格上昇によって潤った国民経済効果が国防費―ロシアでは05年に28％増―に及んだこと、また中ロが連携して東アジアで軍事プレゼンスの強化―05年より「平和の使命」と称する大規模な合同軍事演習実施―に乗り出したことがある。

経済が好調な中ロ両国は、兵器の近代化も産業の発展の不可欠な要素と位置付けている。特に、ガス・原油以外の産業にさしたる成長がみられないロシアは、軍事技術開発と兵器輸出に熱心に取り組んでいる。ロシア製兵器のお得意先は中国とインドで、両国だけで07年の兵器輸出額の約2／3を占めていた。ただし、この比率は、一見蜜月関係にある中ロ関係ではあるが、強力になった中国の軍事プレゼンスがシベリア・極東に及ぶことを懸念するロシアと、兵器の国産化を推進したい中国の思惑もあって減少傾向がみられる。そのため、ロシアは欧米兵器依存を嫌う地域への浸透を熱心に働きかけている。その結果として、2006年よりマレーシアの空にSu-30MKM（スホーイ30；末尾のMはマレーシア版を意味する）が飛行することになった。

08年には、国際金融危機をきっかけとする経済の落ち込みがあり、ロシア機に対するスクランブル回数は減少した。しかしながら、産業の立て直しを模索するロシア政府は一層兵器産業への肩入れを強めている。そのような現状をみると、今後とも中ロ両大国による兵器の開発や輸出が継続し、何処かの地域の軍事プレゼンスを高め続けることが懸念される（本年9月、ロイター通信は、ロシアがベネズエラに武器供与目的で22億ドルの融資を行うことを伝えた）。

［図］　最近10年間のスクランブル実施回数とその内訳



出所:http://www.clearing.mod.go.jp/hakusho_data/2009/2009/html/13124200.html